



小山 薫堂

放送作家
脚本家
京都芸術大学 副学長

集中 OPINION

生きて行く事の尊さを見つめ直し 当たり前前の価値観を伝える万博に

——大阪・関西万博のテーマ事業プロデューサーとして、準備に取り組みられています。

小山 これ迄の万博は、多くの人に、より良い未来

を見せる為の博覧会でした。特に1970年代の万博は「未来はこんなに素敵なんだよ」と人々をワクワクさせた。今回は8人もプロデューサーが居るので、僕は未来より、今を見つめ直すパビリオンにして、当たり前前の生活の尊さの様なものを伝えたいと思います。勿論、食の未来も盛り込むのですが、本来の目的はそこではなく、食育に近いかも知れま

せん。今回の万博に於ける僕のミッションは食を通して命について考える事ですから、食について改めて考えようと訴えたい。例えば、それぞれの命は、

他の命を奪って成り立っています。人間は自分の命を守る為に、どれだけの命を犠牲にしなければならぬのか。ご飯を食べる前には「いただきます」と言いますが、本当に心から「有り難い」と思って日々の食に向き合わなければならぬ。そうする事で、他者への思いやりや優しさを磨き上げる事が出来ると思います。ひいては、それが良い社会に繋がります。大袈裟

開催まで2年を切った「2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）」。6月には8人のプロデューサーが、各テーマに沿って展示を行う「シグネチャーパビリオン」の概要も公表される等、準備も着々と進んでいる。その内「食」に関する展示は、放送作家で脚本家、京都芸術大学副学長も務める小山薫堂氏がプロデューサーを務める。熊本県のマスコットキャラクター「くまモン」の生みの親として知られ、衛星放送で映画の魅力を伝える番組に出演したり、入浴の楽しみを「湯道」として広める活動をしたりと様々な分野で活躍する小山氏に、万博開催の意義や展示を通じて伝えたい思いの他、様々な企画を手掛ける発想の原点等について話を聞いた。

に言うなら世間で取り組んで今、日本を

せ下さい。

小山 最近の

はありませ

を、日本は

いました。そ

た事を言語

続きを読むには購読が必要です



あま

も再利

すの内

た日本